



Title	動詞doubtに続く接続詞について：現代イギリス英語における実態
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪大学英米研究. 2024, 48, p. 23-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99599
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

動詞 doubt に続く接続詞について

ー現代イギリス英語における実態ー

大津 智彦

1 導入

本稿は現代イギリス英語の特に口語において動詞 *doubt* に続く従属節を導く接続詞の種類についてその実態を探ることを目的としている。例えば第6版(2014)の *Longman Dictionary of Contemporary English* によると、動詞 *doubt* の定義を “1 to think that something may not be true or that it is unlikely” としたあと、従属節が続く場合として次のように例文を挙げている。

doubt (that)

¶ *I doubt we'll ever see him again.*

doubt if/whether

¶ *You can complain, but I doubt if it'll make any difference.*

つまり、この辞書を見る限りでは *doubt* の意味は同じであるまま、続く接続詞は *that*、形として現れないいわゆるゼロ接続詞、*if*、*whether* のいずれでもあり得るということになり使用の実態が分からないのである。

Oxford English Dictionary (OED) でも事情は変わらず、“To be uncertain or divided in opinion about; to hesitate to believe or trust; to feel doubt about; to call in question; to mistrust.”¹ と定義したあと、

1.2.b. With clause, introduced by *whether*, *if*, *that*.

としてやはりいずれの接続詞も可能であるということしか分らない。

他方、Austin (2009: 101) では次の 4 つの例について接続詞によって意味の違いが生じうるという考えに同調し、(1a) から (1d) にかけて従属節の事態が起こらない “certainty” から “mere uncertainty” への “declining scale” を成していると見る。

- (1) (a) I doubt we'll make a profit on it.
- (b) I doubt that we'll make a profit on it.
- (c) I doubt if we'll make a profit on it.
- (d) I doubt whether we'll make a profit on it.

しかし、Austin (2009: 103) はそののち Fieldhouse (1982: 40) の “The idea that the choice depends on the intention of whoever expresses the doubt, i.e. whether he intends to confirm or disavow it, no longer stands up, though it may have been sound once.” という一節を引用し、接続詞の違いによる意味の差がない可能性について言及している。また、Huddleston & Pullum (2002: 984) も “With the verb *doubt*, however, it seems that the semantic distinction is not just blurred but lost altogether” として that あるいは whether のどちらを使うかで意味の差はないと断定している。

興味深いのは Austin (2009: 103-104) が *doubt* に続く接続詞の変化が 1900 年代後半以降に起こった可能性を示唆している点である。Austin (2009: 103) によると Fowler の 1926 年初版の *A Dictionary of Modern English Usage* および Gowers による 1968 年の改訂版では否定文と疑問文以外では *whether* が用いられると頑として主張しているのに対し、1998 年の Burchfield による改訂版では 19 世紀の最後の四半世紀から肯定文では *whether* と同等に that あるいはゼロ接続詞が共起し、意味はいずれの場合も “think it unlikely” であるという。また、Austin (2009: 104) は続けて、隣人

に doubt にまつわる疑問を詳細は省いて話したところ、その隣人はすぐに “I doubt I’ll be using that word again” と言った直後、“I doubt whether I’ll be using that word again” と言いなおしたという経験談を紹介したあと、“Fowler and his fellow prescriptivists cast a long shadow!” と締めくくっている。

以上から、①少なくとも Fieldhouse (1982) のころから doubt に続く 4 つの接て続詞のうちどれが用いられても文の意味に差がない可能性が高く、② 1900 年代を通して用いられる接続詞の種類に変化が生じた、ということが窺える。この 2 つの仮定に基づき、以下、セクション 2 では本研究の調査方針、セクション 3 では調査結果と考察、セクション 4 では全体のまとめ、の順に進めていく。

2 調査方針

導入で見たように、辞書や文法書の記述では doubt に続く接続詞の使用の変遷や実態を正確に把握することが不可能であるため、過去から現在に至るまでの検索が可能な大規模コーパスを用いそれらの点を明らかにすることが本研究の目的である。

表 1 は Mark Davies が提供する書き言葉からなる NOW Corpus、表 2 は話し言葉からなる TV Corpus を用い「人称代名詞 + doubt (全ての変化形)」の連続を検索した結果の一部である。これらの表から分かるようにどちらのコーパスでも I doubt で始まる用例、つまり「一人称単数代名詞 + 現在形の doubt」の形式を取る用例が圧倒的に多く、これは話者本人がその場で自分の疑念を表明するという談話機能を持っており²、口語あるいはそれに類したジャンルに好んで用いられる表現であるためである。このことから今回はまずは口語の TV Corpus を用いた調査から行うことにした。TV Corpus が今回の調査目的に相応しいもう一つの理由はそれが 1950 年代から 2010 年代に至るまでのスクリプトを提供している点である。導入で述べたとおり、

Fowler の 1926 年初版の *A Dictionary of Modern English Usage* および Gowers による 1968 年の改訂版では否定文と疑問文以外では *whether* が用いられると主張しているのに対し、1998 年の Burchfield による改訂版では肯定文では *whether* と同等に *that* あるいはゼロ接続詞が共起すると記述内容が変化している。よって、TV Corpus は 20 世紀後半から現在にかけての変遷の有無を調べる格好のリソースとなる。また、*A Dictionary of Modern English Usage* を著した Fowler はイギリス人であり、その改訂を行った Gowers や Burchfield もイギリス人であることからイギリス英語に焦点を置き、TV Corpus のうち UK/IE の部分を検索した。なお、TV Corpus の構成は³に挙げた表が示すとおりだが、UK/IE の 1950 年代は語数が極端に小さいので 1960 年以降を対象とした。

上記の通り、*I doubt* で始まる構文は口語で主に用いられるが、比較のためイギリス英語の書き言葉の調査も試みた。ただ、イギリス英語の書き言葉に関しては Corpus of Historical American English (COHA) のように近・現代英語期を通してきめ細かく検索ができるコーパスが存在しない。よって、1970 年代から 1990 年代初期のテキストを集めた British National Corpus (BNC) と BNC の後継で、2010 年代のテキストからなる British National Corpus 2014 を利用することとし⁴、書き言葉でも特に formality の高い academic prose と formality に幅のある newspapers を検索した⁵。

なお、家入 (2008: 318) も記している通り、Dixon (1991: 216)、Huddleston & Pullum (2002: 984)、その他多数の先行研究が指摘するところでは、*doubt* を動詞とする文が否定形の場合、*whether* あるいは *if* は用いられず、*that* もしくはゼロ接続詞が必須とされる。実際に「*I don't doubt* + 接続詞」の文字列で TV Corpus を検索したところ、接続詞が *that* であるケースが 59 例、*if* であるケースが 1 例と圧倒的な差が現れた。このことから今回の調査の対象は肯定文に絞ることにする。

表 1 NOW Corpus における頻度数

1	I DOUBT	61211
2	WE DOUBT	5728
3	HE DOUBTED	4445
4	HE DOUBTS	3667
5	YOU DOUBT	3296
6	THEY DOUBT	3219
7	I DOUBTED	1691
8	SHE DOUBTS	1087
9	SHE DOUBTED	1086
10	THEY DOUBTED	943

表 2 TV Corpus における頻度数

1	I DOUBT	7008
2	YOU DOUBT	455
3	I DOUBTED	266
4	YOU DOUBTING	75
5	YOU DOUBTED	65
6	WE DOUBT	25
7	WE DOUBTED	22
8	I-I DOUBT	18
9	HE DOUBTS	18
10	HE DOUBTED	17

3 調査結果と分析

3.1 TV Corpus（話し言葉コーパス）における I doubt

図 1 に年代順に I doubt に続く接続詞別の割合を示した⁶。このグラフから窺えることを順に記していきたい。まず、1970 年代はゼロ接続詞（今後 zero）のみで過半の割合を占めているが、1960 年代、1980 年代においては if と whether の合計が占める割合が 80% 前後に及ぶ点に注目したい。これは家入（2008: 322）の「whether 節および if 節の全体に対する割合は徐々に上昇し、19 世紀、20 世紀になってようやく 80% に近づいている」という記述とほぼ一致する結果である。家入（2008）は OED をデータベースとしているため口語コーパスを用いたこの調査と単純な比較はできないが、少なくとも口語においても文語と同様の傾向が 1980 年代まで続いたと言える。しかし、さらに細かく観察すると、1960 年代では if の占める割合は全体の 75%、whether のそれは 7%、1980 年代ではそれぞれ 65% と 11% である。zero の割合が高い 1970 年代においても if は全体の 34%、whether は 8% で

ある。つまり少なくとも 1960 年代以降、if の割合の方が圧倒的に高いのである。筆者の手元にある Fowler (1965) で改訂を行った Gowers は doubt (ful) の項目で “it is contrary to idiom to begin the clause that depends on these with *that* instead of the usual *whether*” と記し、Fowler の *whether* への強いこだわりを維持しているが、口語での実態はむしろ if へと大きく変化していたのである。if 節の使用の増加については家入 (2008: 322-323) も「肯定文の doubt に続く if 節の使用は、19 世紀から 20 世紀にかけて急速な伸びを示している」と観察し、同論考の図 1 の 20 世紀に当たる部分は *whether* と if が大まかに見て 1:1 の比率を示している。今回の調査では 20 世紀後半以降が対象であること、コーパスが口語であることから if の比率がさらに大幅に進捗したものと推測される。if 節が続く用例を下に挙げておく。

- (2) The door is locked. I doubt if you can force it. (The Avengers, 1962)
- (3) I doubt if any creatures can walk through iron shutters.
(Doctor Who, 1989)
- (4) Well, I doubt if many widowers find that an easy task.
(Arthur & George, 2015)

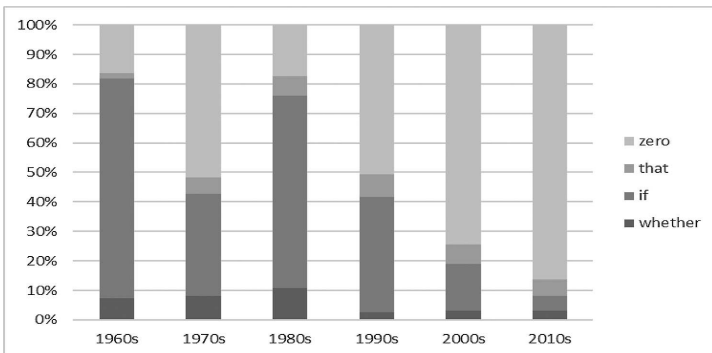


図 1 I doubt に続く接続詞の年代毎の変化 (TV Corpus)

次に注目したいのが 1990 年代以降の *zero* の割合の大きな拡大である。1980 年代では *zero* が全体に占める割合は 17% であったものが、1990 年代には 51%、2000 年代には 75%、2010 年代には 86% にものぼり、直近の 2010 年代では *I doubt* の次にはほとんどの場合、*zero* が続くと言えるほどである。では、この *zero* の急増はどのような条件下で進展したのであろうか。ひとつ言えるのはそこに Rohdenburg (1995) の提唱する複雑性の原理 (complexity principle) が関わっていることである。抽出できた用例数は少ないが表 3 から分かるように、*very much* のような副詞句が *doubt* と従属節の間に挿入された場合、1960 年代、1970 年代では *zero* の用例は見つからず、2010 年代になって初めて *zero* の比率が過半数を超える。つまり、*zero* への移行には当初、*zero* の頻度が比較的に少ない時には *very much* のような副詞句の挿入が *whether*、*if*、*that* といった接続詞を保持させていたが、*zero* の勢いが増してくると複雑性の原理さえ乗り越えて *zero* の頻度が増加していったものと思われる。なお、家入 (2008: 326, 2012: 128) は Thompson & Mulac (1991) において *I think* について *zero* が続く場合、いわば “epistemic adverb” として機能しているという記述に言及し、*I doubt* が文中に現れる 1659 年の例を挙げて *I doubt* に *zero* が続く場合も同じく epistemic な用法の発達が見られると指摘している。筆者はその可能性を否定するものではないが、今回抽出された「*I doubt* + *zero*」の全用例 256 例中、主節となる文の文中や文尾に *I doubt* が現れる例は 1 例も見つからなかった。このことから現代英語において *I doubt* の epistemic adverb としての用法が発達しているか否かについては慎重な見方をすべきであることのみをここでは記しておきたい。下に *very much* の挿入を伴う *zero* の用例をいくつか挙げておく。

- (5) *I doubt very much it's fully automated.* (Rumpole of the Bailey, 1983)
- (6) *I doubt very much it's about Africa.* (MI-5, 2006)
- (7) *I doubt very much we're going to sell it now.* (Husle, 2011)

表 3 I doubt very much に続く接続詞の年代毎の変化

	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s	2010s
whether	1	2	0	0	2	2
if	3	2	0	1	0	1
that	0	0	2	1	2	2
zero	0	0	1	0	2	7
合計	4	4	3	2	6	12

3.2 BNC1994 と BNC2014（書き言葉）における I doubt

図 2 に I doubt に続く接続詞別の割合を BNC1994 の Academic と Newspaper、BNC2014 の Academic と Newspaper の順に示した⁷。まず、BNC1994 の結果から見ていく。BNC1994 の written component は 1970 年代から 1990 年代初期のテキストからなるが、この期間では Academic と Newspaper のいずれのジャンルにおいても if と whether の合計が 70% を超える。しかし、if と whether の割合は両者では大きく異なり、Academic では whether が全体の 47% であるのに対し、Newspaper では 17% であり、Academic のような formality の高い文体では 1990 年初期までは whether が全体の約半数を占めるほど優勢であったことが実証された⁸。逆に Newspaper では if の占める割合の方が大きく全体の 55% である。これはセクション 3.1 で見た TV Corpus の 1980s の if の割合に近い。図 1 の 1980s と図 2 の 1994 News の棒グラフの相似性に注目されたい。Newspaper が口語に近い傾向を示していたことが分かる。

次に図 2 に示された BNC2014 の結果を見る。Academic と Newspaper を比較すると BNC1994 の場合と同じく両者の間に大きな差がある。特に際立っているのが Academic では zero が 17% であるのに対し、Newspaper では zero は 74% にも達し、これは TV Corpus の 2000s に匹敵する頻度である。BNC2014 でも文体によって doubt に続く接続詞の違いが明らかであるが、ここで注目すべきなのは BNC1994 では if と whether が競合の主役であった

のが、BNC2014 ではそれが Academic では zero、that、if の競合、Newspaper では zero と that の競合に置き換わっていることである。約 20 年の間に書き言葉においては doubt に続けて whether を使うことが非常に珍しくなったと言える。OED をコーパスとして用いた家入（2008: 322-323）は「doubt に続く if 節の使用は、19 世紀から 20 世紀にかけて急速な伸びを示している」と指摘しているが、この調査で上記のように明らかになったことはその延長線上にあるもので、doubt に続く接続詞のここ 200 年の動きは概略、whether →if→that→zero と推定できるのではないだろうか。もちろん、それにはテキストのジャンルによる違いがあり、Academic ではそれがまだ if もしくは that の段階にまでしか来ていないが、口語では最終段階の zero までほぼ到達し、Newspaper は口語の直ぐ後ろに迫っている様子を図 1、図 2 は示している。実際、Newspaper における zero の勢いは口語に劣らないほど強いものがある、通常、従属節の主語の長さは接続詞の省略を阻むものとして Complexity Principle の 1 例として挙げられるのだが、次のように関係節を内包するような主語を持つ zero の用例も見つかっている。

(8) I doubt those who fought the necessary battle for women to be taken as seriously as men in public affairs and the workplace would regard £10 signed-and-scented selfies of ‘ding-dongs’ as what it was all about. (2015, *Daily Mail*)

用例 (8) の出典は *Daily Mail* で、BNC2014 ではこの新聞の subgenre を newspapers: mass market と分類していることから分かるように Newspaper でも formality が低い方である。しかし、このような例は mass market の新聞に限らない。(9) は *The Guardian*、つまり newspapers: serious と分類される Newspaper からの用例であるが、長い主語にもかかわらず doubt のあとに zero が続いている。

(9) I doubt Martin Rosen and John Hubley, directors of the 1978 film version,

wanted to scare the bejesus out of their young audience either.

(2014, *The Guardian*)

ただし、BNC2014 の Newspaper において *whether* が続く 4 例のうち 3 例までが *newspapers: serious* の subgenre に属するものであった。以下に 2 例を挙げる。

(10) I doubt whether Amazon is driven by social conscience to preserve thousands of unskilled jobs that don't need to exist. (2015, *The Times*)

(11) I doubt whether many of the wedding guests recognised the poem. (2014, *Financial Times*)

Newspaper にも broad sheet と tabloid など formality の高いもの低いものがあるのに加えて、記事自体にも editorial、reviews、reportage など文体が異なるため一様な結果を得ることはできないが、BNC1994 と BNC2014 を比較すると Newspaper 全体として *zero* 方向への移行を示していることは明らかであ

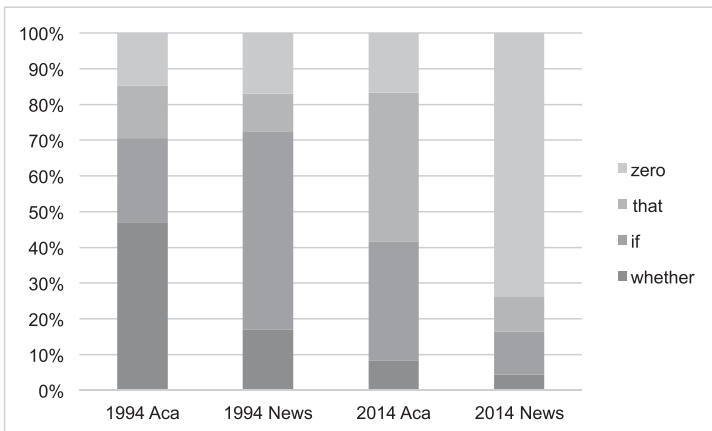


図 2 I doubt に続く接続詞の年代毎の変化 (BNC1994 と BNC2014)

る。

4 まとめ

ここまで TV Corpus と BNC (1994)・BNC2014 を用いて話し言葉および書き言葉において I doubt に続く接続詞がどう変化したかを見てきた。まず話し言葉では、1960 年代と 1980 年代においては if と whether の合計が占める割合が 80% 前後に及ぶ。なかでも if の占める割合の大きさは注目すべきで、Fowler (1926, 1965) は whether への強いこだわりを示しているが、口語での実態はむしろ if へと大きく変化していた。if の頻度の高さは 1990 年代まで続き、その後、2000 年代、2010 年代にかけて急速に減少していく。これに代わって台頭してきたのが zero である。zero は 2000 年代には全体の 74%、2010 年代には 86% を占め、直近の現代イギリス英語では圧倒的な勢いを見せている。

次に書き言葉でも BNC1994 のテキストの年代である 1970 年代から 1990 年代初期までは Academic と Newspaper のいずれのジャンルにおいても if と whether の合計が 70% を超え、同時期の話し言葉と同様の傾向を示している。話し言葉と異なるのは同時期において Academic では whether の割合が全体の半分近くを占め、formality の高い文体では whether を残していたことが窺える。BNC2014 でも Academic と Newspaper の間に接続詞の違いはあるが、2010 年代においては Academic でも whether は大きく減退し、if、that、zero の競合となり、Newspaper では if、that さえ数を減らし、大多数が zero となっている。

以上の観察をまとめると 20 世紀後半から 21 世紀初頭にかけて I doubt に続く接続詞は whether→if→that→zero の順で移行しており、話し言葉か書き言葉かによってその進度は異なる。同じ書き言葉でも formality が高い場合にはその進度が遅い。向こう 10 年、20 年後に果たしてどのように進展していくのか興味深いところである。

注

- 1 “doubt, v.”. *Oxford English Dictionary*, Oxford University Press, July 2023, <https://doi.org/10.1093/OED/9394628283>
- 2 doubt の談話機能については家入（2012: 127-128）にも言及がある。
- 3 TV Corpus の構成は下記の通り。

	US / CA	UK / IE	AU / NZ	MISC	TOTAL
1950s	2,012,631	20,740	—	—	2,033,371
1960s	6,728,110	2,168,841	—	5,727	8,902,678
1970s	5,717,836	3,063,468	—	—	8,781,304
1980s	11,905,793	3,054,673	49,263	1,814	15,011,543
1990s	26,825,820	4,373,746	78,769	228,645	31,506,980
2000s	71,570,270	14,511,570	997,291	464,778	87,543,909
2010s	141,039,715	25,959,596	4,015,203	1,406,977	172,421,491
TOTAL	265,800,175	53,152,634	5,140,526	2,107,941	326,201,276

- 4 Written BNC2014 の構成は下記の通り（Brezina, Vaclav, Abi Hawtin and Tony McEnery（2021: 607）より引用）。テキストは 2010 から 2019 に発表されたものから収集している（Brezina, Vaclav, Abi Hawtin and Tony McEnery（2021: 609））。なお、British Natinal Corpus 2014 の検索には #LancsBox: Lancaster University corpus toolbox を用いた。

Table 5: Written BNC2014 genres/registers and subgenres/subregisters.

Genre/register	Subgenre/register
1. Academic prose	i) arts and humanities; ii) medicine; iii) natural science; iv) politics, law and education; v) social science; vi) technical and engineering
2. Fiction	i) poetry; ii) general prose; iii) prose for children and teenagers; iv) science fiction and fantasy; v) crime; vi) romance
3. Newspapers (serious, mass market and regional)	i) arts and entertainment; ii) commerce; iii) editorial; iv) reportage; v) science; vi) lifestyle; vii) sports i) arts and entertainment; ii) commerce and business; iii) editorial; iv) reportage; v) science; vi) lifestyle; vii) sports i) arts and entertainment; ii) commerce and business; iii) editorial; iv) reportage; v) science; vi) lifestyle; vii) sports
6. Magazines	i) lifestyle; ii) mens' lifestyle; iii) TV and film; iv) motoring; v) food; vi) music; vii) science and technology
7. E-language	i) tweet; ii) facebook post, iii) blogpost; iv) discussion forum; v) email; vi) SMS instant message; vii) online review
8. Other	i) television script; ii) drama script; iii) Hansard; iv) miscellaneous

- 5 注4の表から分かるように Newspapers には“serious”から“mass market”まで混在している。
- 6 図1の元となった用例数を示すデータは下記の通り。

	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s	2010s
whether	4	10	5	2	6	12
if	41	42	30	30	29	19
that	1	7	3	6	12	21
zero	9	63	8	39	137	325
合計	55	122	46	77	184	377

7 図 2 の元となった用例数を示すデータは下記の通り。

	1994 Aca	1994 News	2014 Aca	2014 News
whether	16	8	1	4
if	8	26	4	11
that	5	5	5	9
zero	5	8	2	67
合計	34	47	12	91

8 これは家入（2008: 323）が Whitcut（1994: 95）を引用して「whetherの方がifよりも formal であると述べている」という点と一致する。

参考文献

- Austin, Frances (2009) “Points of Modern English Usage LXXXV.” *English Studies*, Vol.90, No.1: 100-104.
- Brezina, V., P. Weill-Tessier, & T. McEnery. (2020). #LancsBox v. 5.x. [software]. Available at: <http://corpora.lancs.ac.uk/lancsbox>.
- Brezina, V., A. Hawtin & T. McEnery (2021) “The Written British National Corpus 2014-design and comparability.” *Text and Talk*. 41 (5-6) 595-615.
- Davies, Mark. (2004) *British National Corpus* (from Oxford University Press). Available online at <https://www.english-corpora.org/bnc/>
- Davies, Mark. (2016-) *Corpus of News on the Web (NOW)*. Available online at <https://www.english-corpora.org/now/>.
- Davies, Mark. (2019) *The TV Corpus*. Available online at <https://www.english-corpora.org/tv/>.
- Dixon, R. M. W. (1991) *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford: Clarendon Press.
- Fieldhouse, Harry. (1982) *Everyman’s Good English Guide*. London: Dent.
- Fowler, H. W. (1926) *A Dictionary of Modern English Usage*. Oxford: Clarendon Press.
- Fowler, H. W. (1965) *A Dictionary of Modern English Usage*. 2nd ed. Revised by Sir Ernest Gowers. Oxford: Oxford University Press.
- Fowler, H. W. (1998) *The New Fowler’s Modern English Usage*. 3rd ed. Revised by R. W. Burchfield. Oxford: Oxford University Press:

- Huddleston, Rodney & Geoffrey K. Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 家入葉子 (2008) 「Doubt にかかわる構文の歴史的変化について – *The Oxford English Dictionary* の引用文データの分析から」『九大英文学』(九州大学大学院英語学・英文学研究会) 50, 317-338.
- 家入葉子 (2012) 「Doubt にかかわる構文の歴史的変化について (2) : Early Modern English Prose Selections の分析から」『九大英文学』(九州大学大学院英語学・英文学研究会) 54, 119-134.
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 6th ed. (2014) Harlow: Pearson Education Limited. *Oxford English Dictionary*. Oxford University Press, July 2023.
- Oxford English Dictionary*. Oxford University Press, July 2023, <https://doi.org/10.1093/OED/9394628283>.
- Rohdenburg, Gunter (1995) “On the Replacement of Finite Complement Clauses by Infinitives in English.” *English Studies*, Vol.4: 367-388.
- Thompson, S. A. & A. Mulac (1991) “A Quantitative Perspective on the Grammaticalization of Epistemic Parentheticals in English.” In E. C. Traugott & B. Heine (eds), *Approaches to Grammaticalization, II: Focus on Types of Grammatical Markers*, Amsterdam: John Benjamins, 313-329.